HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	あとがき
Author(s)	植木, 迪子
Citation	独語独文学科研究年報, 20, 323-323
Issue Date	1993-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/25968
Type	bulletin (article)
File Information	20_P323.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

あとがき

独語独文学科研究年報第20号は、青柳謙二先生の退官記念号となります。青柳先生は昭和37年4月に北海道大学文学部独文学講座講師となられてから32年間、教養部ドイツ語担当の時期を加えると、昭和31年から実に38年の長きにわたり、一貫して北大のドイツ語・ドイツ文学に携わり、数多くの学生を指導してこられました。平成6年3月を境として先生が北大を去られることは、先生に教えを受けたわれわれにとっては誠に淋しいかぎりです。ご退官までの二年間を文学部長の激職にあられた先生に、長い間親しくご指導いただいたわたくしたちの感謝の念をこめて、ご指導の成果の一端なりとも残したいと退官記念号を計画いたしました。今回は会員以外の卒業生からも熱心な執筆の申し出があり、先生の温情とご恩にいささかでも報いることができるものとなれば幸いです。

思えば寒風吹き荒ぶ通称シベリア街道を往復して、旧予科時代の名残を留める木造校舎のすきま風に震え、研究室の投げ込み式ストーブで暖をとっていた昭和30年代、一転して新築なった現文学部棟へ移り、独語学講座が新設されて、塩谷、川島両先生をお迎えし、入れ違いのように小栗先生が東北大学へ移られた昭和40年代、その新築の文学部棟も歳月とともに老朽化して雨漏りがするようになり、大型改修工事に研究室の機能が半分麻痺するような半年を経験し、それに続く管理棟の改修工事もようやく終了して、文学部がふたたび新しく明るくなるちょうどその時期に、青柳先生は去っていかれます。新しくなるのは建物ばかりではありません。大学院重点化構想によって大学がその将来構想を問われています。また、平成7年からは教養部が廃止され、学生は大学入学と同時に文学部に所属します。大学も変革の波に洗われようとしています。文学部長となられるのに先立つ一年有余、土曜日の夜にまでおよぶ会議を数十回も重ねて、青柳先生は文学部の将来構想委員会の委員長として大学院の改革案を答申なさいました。先生が基礎を築かれた独文科の今後は、先生が育てられた学生たちの肩にかかっています。

先生のご指導に報いるには、われわれ一同、今後とも努力を重ねるほかありませんが、この記念号を先生に対する同僚、卒業生、大学院生の感謝の念の証とするとともに、先生のこれからのいっそうのご健勝をお祈りいたします。

平成5年8月

植　木　迪　子（文学部教授）